

P1-394 AIHにおけるCASAの有用性の検討慈恵医大¹, 富士市立中央病院²林 博¹, 斎藤隆和¹, 遠藤尚江¹, 村尾明美¹, 高田 全², 杉本公平², 田中忠夫¹

【目的】客観的に精子を分析可能なCASA (Computer aided sperm analysis) を用いて体外受精での受精率との相関には多数の報告がみられる。しかし比較的簡便に行える不妊治療の配偶者間人工授精法 (AIH) においては, CASA を用いて分析した報告はみられず, その有用性は低いと考えられてきた。今回我々は, AIH における精液に対して CASA による客観的評価を施行し, その有用性を検討した。【方法】2004 年 1 月から 2004 年 12 月までに当院でインフォームドコンセントを得て AIH を行った 77 症例 178 周期を対象とし, 攪拌密度勾配遠心法 (Isolate Stock Solution kit: Irvine 社) を使用し精液を調整し良好運動精子を回収した。検討項目として, 原精液および調整後精液の精子濃度, 運動率, 総精子数および運動精子回収率を検討した。さらに妊娠症例 (33 例) と非妊娠症例 (44 例) の二群において, 処理前及び処理後の CASA の各項目についても比較検討した。【成績】AIH 精液処理後では処理前に比較し CASA のすべての項目で所見が改善していた。妊娠症例と非妊娠症例の比較では運動精子回収率に差は見られなかった。CASA による分析では調整前の精液にて VAP ($p=0.004$), VSL ($p=0.01$), VCL ($p=0.0001$), ALH ($p=0.001$), Rapid ($p=0.005$) と精子の直進性に関する項目で特に妊娠症例において有意に高かった。なお, 調整後の精子には CASA 分析にて有意な差は認めなかった。【結論】AIH での濃度勾配による精液処理では, 処理後に精液所見の改善を認めた。さらに処理前の CASA で直進運動性に関する項目で高値を示すものは AIH での妊娠が期待でき, 直進運動性の低いものは早期の ART への移行が望まれることが示唆された。

P1-395 性同一性障害 Male to Female Transsexual (MTF) 症例のホルモン療法の効果発現の検討

岡山大

佐々木愛子, 中塚幹也, 野口聡一, 鎌田泰彦, 安達美和, 平松祐司

【目的】日本における正式な性同一性障害の診療が始まって 10 年になり, 社会一般での認識も広がり, 診療を希望して医療施設を受診する症例も増加している。MTF 症例 (身体の性は男性, 性の自己認識は女性) は, 女性ホルモンによるホルモン療法を希望して, 産婦人科を受診すること多いが, 日本人 MTF 症例におけるホルモン療法に関するデータはほとんどない。今回, ホルモン療法の効果発現について検討したので報告する。【方法】MTF 症例でホルモン療法を施行しており, 同意の得られた 84 名を対象とした。年齢は 36.0 ± 10.5 (means $\pm$ S.D.) [17-60] 歳であり, ホルモン療法の開始年齢は 33.7 ± 10.3 [16-55] 歳, ホルモン療法の継続年数は 2.9 ± 3.6 年 [3 ヶ月-20 年] であった。ホルモン療法としては, エストロゲン製剤の内服, 筋注, 両者の併用が見られた。【成績】体型の女性化が見られた症例は 73.1% で 11.3 ± 10.8 ヶ月かかっていた。乳房腫大は 87.7% で 7.6 ± 9.5 ヶ月, 肌の変化は 75.0% で 8.1 ± 8.8 ヶ月, ひげの減少は 22.7% で 12.0 ± 6.6 ヶ月, 声の変化は 11.8% で 9.6 ± 7.9 ヶ月, ペニス勃起の減少は 84.2% で 6.7 ± 7.2 ヶ月であった。体重は, 58.4 ± 9.4 kg から 61.8 ± 9.6 kg と有意に増加していた。精神的安定は 76.5% に見られたが, 15.7% で反対に不安定になったとしていた。ホルモン療法の継続年数が 1 年未満の症例に比較して, 1 年以上経過した症例の方が身体的変化の満足度は有意に高かった。ホルモン開始年齢が 20 歳以下であった症例 ($n=10$) と 21 歳以上の症例 ($n=74$) との間に身体的変化の発現に有意差はなかった。【結論】女性化発現は部位により差がある。また, 16 歳以上でホルモン療法を開始した場合, 開始年齢による発現の差は見られない。

P1-396 MR キネマトグラフィー (シネ MR) を用いた生理的子宮蠕動の評価および非生理的状态での変化とその意義京都大¹, 京都大京都大学大学院医学研究科核医学画像診断学講座²鈴木彩子¹, 刈谷方俊¹, 小山 貴², 富樫かおり², 樋口壽宏¹, 馬場 長¹, 近藤英治¹, 堀内由佳¹, 八木治彦¹, 万代昌紀¹, 高倉賢二¹, 藤井信吾¹

【目的】MRI (Magnetic Resonance Imaging) の超高速撮像法により一断面 2~3 秒程度の時間で同一断面 T2 強調画像を連続撮像し, 得られた数十枚の画像をつなぎ合わせてシネモード表示したものが MR キネマトグラフィー (シネ MR) である。これにより生体内臓器の動態の評価が可能となるが, 今回, このシネ MR を用いて子宮の生理的動態を月経周期別に検討し, さらに月経困難患者での動態変化および低用量ピル (OC), 子宮内避妊器具 (IUD) 使用時の動態変化の有無とその意義について解析した。【方法】生殖年齢にある健康な婦人科疾患のない女性 19 名に対し, 同意の下, 月経期, 排卵期, 黄体期にシネ MR を施行し子宮の生理的動態を評価した。また OC 服用群 ($n=23$) と IUD 使用群 ($n=4$), 子宮内膜症患者 ($n=31$) にも同様の評価を行い, 生理的動態との差異とその意義について検討した。【成績】子宮では, 筋層内に一過性, 限局性に認められる収縮と junctional zone に律動的な子宮蠕動と呼ばれる運動を認めた。後者の方向性, 強さ, 頻度は月経周期内で著しい変化を示し, 排卵期には精子の輸送を支えられとされる子宮頸部から底部への頻回な蠕動を認めた。また月経期には月経血の駆出に役立つと考えられる底部から頸部への蠕動を認めた。OC 群および IUD 群, 内膜症患者では排卵期の蠕動は減少し, 精子の輸送を抑制していると考えられた。また月経困難の患者では子宮筋層全体におよぶ強い収縮を認める頻度が高く, これは OC 群で抑制されていた。【結論】子宮蠕動の月経周期による生理的变化は, 合目的性を有していると考えられる。シネ MR による子宮の動態評価は, 月経困難症や不妊機序の解明に有用であると思われる。